

インドネシア

国立生物学研究所だより

山 田 勇*

インドネシアの首都ジャカルタから車で南へ約60分、左手前方にゲデーパンゲランゴ山塊、右手にサラック山（2211 m）の秀麗な姿がみえる所にボゴールの町があります。

この町に下宿してすでに半年近く、いつでもほとんどは調査旅行にでている関係上ここに腰を落ち着けているとはいえませんが、それでも旅から帰ってくるとなんとなくほっとするのはすでになかなれたからでしょう。私の下宿は、ジュンバタンメラとよぶボゴール最大のショッピングセンターよりベチャで約10分の所にあり、まわりは同じ型のもと官舎がならび、前庭にうえられたアガチスの大木を通してサラック山が目の前にみえます。

すでに60才をこえた老夫婦が管理しているこの下宿には私以外にインドネシア人の学生3人、病院につとめる女性1人、老夫婦の甥が1人同宿しています。私の部屋は10畳くらいの広さで窓がないため少々暑いのが欠点ですが、たえず持ち込むサンプルの置場が広いので便利です。家賃はひと月3食つきで8,000ルピア、調査にでて1月食事をしない場合は5,000ルピアの契約ですが、調査にい

っても結局全額支払うことになります。インドネシア人学生の通称相場が5,000ルピアといますからそんなに高くありません。むろん、ジャカルタやボゴールで日本人の住んでいる家からくらべるとはるかに見劣りはしますし、食事もそういいとはいえませんが、何をしても気楽であることがいいのです。それに、たえず部屋へやってくる同宿人としゃべるのは楽しいことです。機動性を考え、単車を1台買って、ボゴールにいる時は毎日この下宿から研究所へ通っています。ボゴールの町の中心には植物園があり、隣接してボゴール宮殿、そしてそのまわりに主に生物学系統の大学、研究所がちらばっています。学術都市といわれるだけあってこういった研究所の数は多く、主なもので33、教育施設などを含めると50近い数になります。その中でも伝統的にこの中心をなしているのが現在、国立生物学研究所とよばれる植物園を中心にした研究組織なのです。

ボゴール国立生物学研究所

ボゴールといえば Kebun Raya というくらい、この植物園は有名です。ジャカルタから近いことと、ここ以外にあまり見る所がないこともあって、たえず客があります。平日は外国人および特別許可をもった者以外入場できず、一般に公開されるのは日曜日だけです。この理由は日曜日の雑踏をみるまではわかりませんでした。もし毎日開放したら1週間でこの美しい植物園も荒廢に帰するであろうと思われるくらい、日曜日の群衆はものすごく、よく木に登り、花をとり実を投げ枝を折っています。平日にくる外人客はたいていジャカルタから車できて、さっとひとまわりするだけで、園内を散策する人などほとんどありません。植物園を車でみてまわるという愚劣な行為に加えて、そういう人間に限ってこの植物園はあまりよくないなどといま

* 京都大学大学院農学研究科（森林生態学）



写真 1 ボゴール植物園

すから、私は近頃ますます車族嫌いになっています。16,000点もの植物を擁するこの植物園のよさは1度や2度きてわかるものではないでしょう。150年の伝統と数多い研究者によってつちかわれてきたこの広大な200エーカーの園内のうっそうたる景観は長くいればいるだけ味わい深いものになります。

私の所属するのは、Lembaga Biologi Nasional (LBN) とよばれる国立生物学研究所で、これは大統領直属で内閣と同列の Lembaga Ilmu Pengetahuan Indonesia (LIPI, Indonesian Institute of Sciences) に属します。LIPI に所属する研究所はこのLBNと自然科学関係二つ、科学技術関係六つ、社会科学関係二つの合計11の研究所があり、主にジャカルタ、ボゴール、バンドンにちらばっています。

LBNの下に現在五つの付属研究機関があります。すなわち、Lembaga Penelitian Botani (Institute for Botanical Research), Herbarium Bogoriense, Meseum Zoologicum Bogoriense, Lembaga Penelitian Lant (Institute for Research on Marine Biology),

Kebun Raya で、このうちジャカルタにある Lembaga Penelitian Lant を除いてすべてボゴールの植物園内およびそのまわりにあります。私がたえず出入りするの、これらのうちの Kebun Raya と Herbarium Bogoriense です。LBN に属するということは自動的に LIPI の世話をうけることになり、したがってビザの延長手続き、通関手続きなどに関しては LIPI の国際部が書類をつくってくれます。

LBN の Director は Prof. Dr. Otto Soemarwoto で、彼は本来は植物生理学者としてカリフォルニア大学で Ph. D をとり、帰国後、前 Director の Ir. Soetomo (現在、主に植物生理学方面の研究をおこなう Lembaga Penelitian Botani の Director) のあとをうけて、LBN のきりもりをおこなっています。彼は同時に SEAMEC (South East Asian Ministers of Education Council) の Regional Center for Tropical Biology (BIOTROP) の Director としてその組織づくりに余念がありません。彼の忙しさは実に殺人的で、たえずタイ、マレーシア、シンガポールの会議に往復しています。

Kebun Raya の園長はハワイ大学 Ph. D の anatomist, Dr. Didin で、彼はまた LIPI の Secretary Jenderal として火曜日以外は毎日、ジャカルタの LIPI 本部へかよっています。したがって、Kebun Raya の実務は副園長格の Ir. Saleh がとっています。彼もアメリカのフロリダ、ルイジアナ両大学で園芸を学んだ人です。

Kebun Raya に職をもつ人は、大部分園内にある小ぎれいな官舎にすんでいます。また、ゲストハウスもあって、Director の許可のもとに滞在できるようになっています。植物園はボゴール以外に Tjibodas, Purwodadi, Bali, Padang の4カ所あり、これらもすべて LBN の管轄にあります。

ボゴールへきて最初に Herbarium で会ったのは Dr. Prijanto でした。彼は28才、イギリス Edinburgh 大学で Ph. D をとり、その後ストックホルムへわたって Prof. Ertmand に師事して pollen grain の研究をおこない1968年の2月帰国して以来、Forest Research Institute につとめるかたわら、毎日 Herbarium で、自分の研究をしていました。中部ジャワ出身の彼も、すでにインドネシア国籍になっているオランダ人分類学者 Dr. Kostermans の数多い養子の一人です。Dr. Kostermans はインドネシア中からめぐまれない優秀な子供を見つけてきては養子にし、それぞれの性格にあった道に進ませている60才のタカのようなすどい目をした老大家で、彼の養子はすでに30人を越えています。その中には現在、Herbarium の Curator をしている Dr. Rifai、この出版物 Reinwardtia の Editor でハーバード大学をでた Dr. Soegeng、バンドン工科大学の生態学者 Dr. Soeriaatmadja、マレー大学に講師として滞在している Dr. Soepadmo などがいます。Dr. Kostermans の家にはまだ中・高校生のはつらつたる少年が数人いますが、これらの少年達の養育費をかせぐために、彼は1～2年に1度は海外へ客員教授としてでかけます。

インドネシアへくる前に立ち寄ったマレー大学で Dr. Soepadmo に聞いた最初の名前が Dr. Prijanto であったこと以来、私と彼とはたえず会って議論し、彼の豊富な調査経験をもとに、われわれの今後のプランを共にたてていたところ、突然、彼がマカッサルで交通事故にあって亡くなったと聞いた時はいっしょん、我が耳をうたがいました。彼はオーストラリアからの2人の FAO 調査員を案内してスラウェシへ *Eucalyptus* の調査にいった帰りに事故にあい、彼とオーストラリア人1人は即死、もう1人は意識不明の重態ということでした。

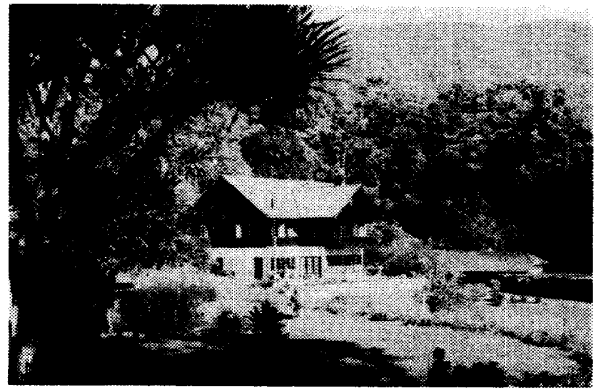


写真 2 チボダス高山植物園

個人的に最良の友人を失った悲しみはもちろんのこと、インドネシアにとってもまたインドネシアへ今後やってくるであろう調査隊のためにも彼の死は大きな損失であることにまちがいありません。それは彼がインドネシアでは実に数少ない動ける身の人間だったからです。ボゴールだけでもアメリカやヨーロッパで教育をうけた優秀な学者は相当みられますが、その大部分が本来の研究に従事せず、ただ administration にのみ時間をとられているのが現状です。そういう中であって Dr. Prijanto は数少ない実験材料と、ほとんどないに等しい研究資金の悪条件のなかで、いつもこつこつと研究していました。本来の仕事がおわっての帰りに Herbarium へ寄り、自分の研究を地道につづける彼の姿がみられないのはさびしいことです。

ウジュン・クロンの自然

ジャワ島の西海岸につきでた半島とその先にあるパナイタン島およびその周辺の島々を含めてウジュン・クロンと称し、自然保護区域としてインドネシア林野総局自然保護野生動物管理課の厳正な保護がなされています。ここはジャワの低地で唯一といっている原生林の保護されている地域であり、その41,120ヘクタールにおよぶ地域にはジャワサイ、トラ、野牛、シカ、クジャクなど数多くの動物

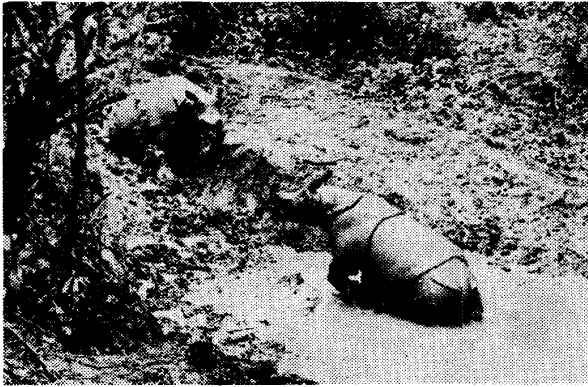


写真 3 ウジュン・クロンのジャワサイ

が棲息しています。この地域がかくも嚴重に保護されてきている理由はジャワサイ (*Rhinoceros sondaicus*) が現在ではここだけにしか棲息しないことによります。

この地域は1921年にはじめて厳正自然保護地域として指定され、1967年にはWWF (World Wildlife Fund) が調査隊を送り、すでに30頭に満たないジャワサイ保護の必要性が再認識され、保護がより強化されつつあります。すでにWWFは地域内のプチャン島に調査基地を設け、サイの密猟を見張る要所要所に人をおいて万全を期しています。本来は林野総局がこの管理を行なうのですが、現在のところWWFがすべてを動かしている形になっています。この任務をまさにこつぱしるサイのごとく遂行するのがスイス・バーゼル大学の Prof. Dr. Schenkel です。

彼の専門は Animal Behavior で、すでに東アフリカでサイの研究をおこなっており、その後こちらへやってきたわけで、1967、68年に各々7カ月間このウジュン・クロンに滞在し、ジャワサイおよびここに棲息する動物の生態を研究し、それをもとに、実際のサイ保護の方策をたてています。彼によりますと、この地域に棲息するサイの数は20頭から30頭、そしてこの1年間に2〜3頭のわりあいふえているから、このままの状態、つまり密猟がない状態が続けば、地球上で最も棲

息数の少ないこの貴重な動物も生存しつづけることができるだろうということです。彼とともに、バーゼル大学の動物学教室の学生もやってきてすでに専門分野を研究し、今年の予定としては、サルと野牛の研究に半年ばかり2人の大学院学生がくることになっています。

珊瑚礁にかこまれた美しいプチャン島から約500m先にウジュン・クロンの半島部があり、最高峰のパユン山は深い原生林におおわれています。しかし、低地林およびプチャン島の森林は1883年のクラカタウの爆発の影響をうけたため、それ以後の比較的新しい森林です。その低地に繁茂するサラック、ロタンなどのヤシ類のトゲはものすごく、人の通行を許しません。1カ所だけある草原には展望台が作られ、草原にあそぶ野牛やクジャクなどの生態が観察できます。森の中を歩いていると30mくらい前をクジャクが歩いていたたり、また突然藪から野牛がとび出したり、野豚がにげていったりします。また実際に姿はみせませんでしたがサイの足跡やぬた場には度々出会います。宿舎のあるプチャン島には鹿が棲息し、夜になると森からでてきて宿舎前の広場で草を食べます。われわれは食料獲得のため、毎夜プラウにのって夜釣りにいくのですが、日本では魚などつれたことのない私にも1晩で大小10匹くらいつれます。熱帯の海はあくまで青く、珊瑚礁のまわりを実に様々な原色の魚がおよぎたわむれています。ボゴールから半日車で西海岸のラブアンへ、ラブアンから約8時間の船旅でつくこのウジュン・クロンはまさに熱帯の自然をそのまま残しているといえるでしょう。

熱帯植物を研究する目的でこの国にやってくる植物学者はチボダス高山植物園で山地林をみて、ボゴールで腊葉を調べ、そして、低地林としてはサバ、サラワクへいきます。カリマンタンやスマトラの低地林では2〜3カ

月ではとても効率よく仕事ができないため、すでにかなり仕事になされ、主にイギリス人を中心にした基地もあり、有能なガイドもいるマレーシア側へいくわけです。

今年の10月から3カ月の予定でおこなわれる British Museum のスラウェシ調査も、すでに計画がおこって10年になるといわれます。発起人の Dr. Kostermans によれば、スラウェシを選んだ大きな理由は未調査地域であることはもちろんだが、それ以上に現地関係者を個人的によく知っていたからだといいます。おそらくこれはこの国全体を通じていえることで、外領へいくのは他国へいくに等しいという言葉もうなずけます。

ウジュン・クロンはかつてはライフ誌に紹介されたり、ユネスコ調査隊がきたりしましたが、現在は、WWF 以外はあまり訪れる人もないようです。ということは、もし WWF がこの保護から手をひけば、また昔の状態にもどり Dr. Schenkel が懸念するようにジャワサイは絶滅する可能性が充分にあります。このウジュン・クロンと同様に、ジャワのも

う一つの自然保護地、チボダス植物園を中心にしたゲデーパンゲランゴ山塊も、厳正保護地に指定されていないすぐ近くの山すそがすでに材木業者によって伐採され、頂上へむかってのびていくのがみえます。日本でさえも原生林保護があればほどむつかしいのに、ましてやこの国ではよほど力を入れて自然保護という観念をうえつけ、制度にはめこまない限り徹底することはむつかしいでしょう。

おそらく生物学のあらゆる分野において、最も重要でかつ興味深いと思われるこのインドネシアが政治的な理由で各国の科学者に敬遠されているのは実に残念なことといえましょう。国立生物学研究所を中心にしたスタッフの努力によって、最近特に国際協力による運動が盛んになりつつあります。この国が今までのような困難なしに能率よく仕事ができるようになるのもそう遠いことではないようです。

なお、本稿の写真は国立生物学研究所の好意により提供されたものです。